Report2

クルレンツィスのモーツァルトを検証

取材・文=中 東生
Text=Shinobu Naka

これ以上望むものはない最高の上演《フィガロ》

テオドール・クルレンツィス&ムジカエテルナによるダ・ポンテ3部作+チェチーリア・バルトリは、ルツェルン音楽祭2019を締めくくる花火のように、満足感と幸福感が炸裂した（9月12～15日）。

ウィーンでは隔日で3部作を上演した彼らだが、ルツェルンでは、特別出演のバルトリと「モーツァルトの夕べ」を2日目に挟んだ4晩連続公演となり、最終日の《コジ・ファン・トゥッテ》では、バルトリがデスピーナを歌うため、昼間は練習、夜は本番という強行スケジュールもこなした。それでも舞台からは、演奏できる幸せが、まるでドライアイスの白い霧が流れ出て広がっていくように、ホール全体を満たした。

クルレンツィスのモーツァルト・オペラ全曲録音は、ブレイク前からソニーミュージックが発売し、2014年に第1作目の《フィガロの結婚》が「エコー・クラシック」を受賞して世界的に注目され始めたものの、個人的にはせっかくの斬新なアプローチなのに、正統なイタリア語の語感の上に構築されていない音楽作

りがところどころに聴かれるのを、たいへん残念に思っていた。それが今回、各演目にイタリア人を起用したためか、大幅に改善されており、《フィガロ》に関しては、これ以上望むものはない最高の上演だったと言っても過言ではないだろう。

題名役のイタリア人バリトン、アレックス・エスポージトは客席から登場し、超高速のレチタティーヴォ等でイタリア語の音楽劇として全幕を牽引した。ザルツブルク音楽祭でもクルレンツィスのイダマンテとして共演が続いているボーラ・マリーは、音楽的に理想的なケルビーノを歌い上げた。チューリヒ歌劇場でも活躍するオルガ・クルチンスカのスザンナ、アンドレイ・ボンダレンコの伯爵も好演した。伯爵夫人のエカテリーナ・シェルバチェンコは、登場時のアリアでは、そのレヴェルに達していなかったが、指揮棒に吸いつけられるような柔軟な歌唱により、適役と納得させた。その他、カットされることの多いアリアも完璧に歌った若手のマルチェッリーナ、ダリア・テリアトニコヴァ、ドン・バジリオのようなブッフォ役にはもったいないほどの声と容姿のクリスティアン・アダム、歌唱的にもヴェテランの域のバルバリーナ、ファニー・アントネロウ等、端役までもが充実し、超弱音から超高速まで、クルレンツィスの求める室内楽的で臨場感のあるスリリングな音楽を実現させていた。

コンサートでのクルレンツィスとバルトリ ©Peter Fischli / Lucerne Festival

バルトリのコンサート

翌日のバルトリ客演は数年前から双方が求め合っていたものだが、その「化学反応」は予想以上に功を奏し、お互いの限界を挑発しながら高め合うような競演だった。合唱も冒頭から実力を誇示し、モーツァルトの魂の振動のような、真実の感情が迫るキリエを聴かせた。「今の音楽界には嘘が多いので、真実を伝えたい」とインタヴュー時に語ったクレンツィスの言葉の意味を、身をもって体験できたのだ。続く「カンタータ」KV409では、男装のバルトリが歌い始めると両性具有の天使が舞い降りたようだ。もう10数年前からバルトリは、バロック音楽の間奏でリズムに合わせて体を動かす傾向があるが、クルレンツィスのビートを効かせた音楽との相乗効果で、まさしくロック・コンサートのようだった。

「《皇帝ティートの慈悲》序曲」では真面目なオペラに戻り、セストのアリアと合唱、そして〈Parto〉では歌声のようなクラリネットを聴かせたフロリアン・シューラーとの、三つ巴の芸術に固唾を飲んだ。

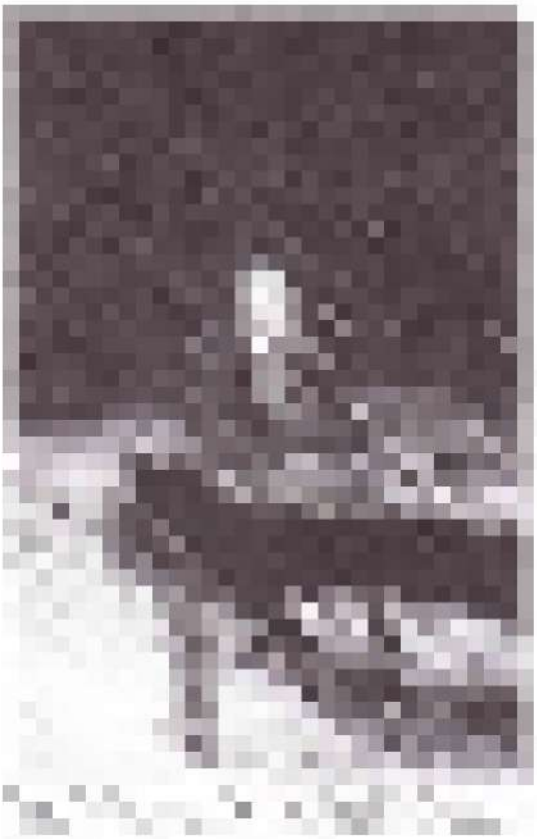
休憩後は拍手も受けずに、悪魔的にタクトを下ろした「《ドン・ジョヴァンニ》序曲」と、裾の長いパステル・グリーンのドレスに身を包んだバルトリが歌う、歌曲のようなドンナ・エルヴィーラのアリア、そして「《コジ・ファン・トゥッテ》序曲」は躍動感のあるすばらしいテンポと、それに確実に着いていく管楽器が興奮を誘った。バルトリは続いてフィオルディリージに扮し、フェッランド役で最終日のために控えているミンジー・レイと二重唱を披露した。あまりの高潮感に、最後の「コンサート・アリア」KV505は間延びして感じた。

無駄のない音楽づくり、《ドン・ジョヴァンニ》

3日目の《ドン・ジョヴァンニ》は電源をすべて落とした数分の後、奈落の底から響くかのように始まった。ペルミ歌劇場のプリマドンナ、ナデズーダ・パヴローヴァのドンナ・アンナはノン・ヴィブラートの叫び声が不快な歌い出しだったが、伯爵夫人役の歌手と同様、指揮棒に操られるがままの柔軟な歌い回しが抜群だった。堅実なケネス・ターヴァーのドン・オッターヴィオとの冒頭の二重唱も、まれに見るスリルを聴かせ、両アリアでは大成功を収めた。

ドンナ・エルヴィーラを歌えるほど成長した、イタリア人若手ソプラノのフェデリーカ・ロンバルディは、イタリアン・スタイルを美しく聴かせ、カイル・ケテルソンは始終美声でレポレッロを好演した。ディミトリス・ティリアコスの題名役は好色な容姿ではないものの、ツェルリーナとの二重唱の甘い歌い回しや経験値でドン・ジョヴァンニに適役だった。クリスティーナ・ガンシュも強気なツェルリーナで存在感を示したが、〈ぶってよ、マゼット〉ですばらしい絡みを見せたチェロ首席奏者の一人、イフゲニー・ルミンツェフも特筆に値する。チューリヒ歌劇場でお馴染みのルーベン・ドロールもマゼットで健闘した。地獄落ちで幕引きとなり、フィナーレは拍手の後のアンコールとして演奏された。総じてスリリングな無駄のない音楽づくりだが、一貫した太いドラマティックなレガートに欠けた。

イタリア色に染まった《コジ・ファン・トゥッテ》

《コジ》はバルトリのデスピーナがイタリア色に染めた。フィオルディリージの

パヴローヴァは前日の疲れか、ずり上げるアタックが気になったが、マリーのドラベッラと高度な歌術を聞かせた。フェッランドのレイは柔らかい声と容姿、ステージ・マナーも一昔前の中国人では考えられないスマートさだが、声に艶やかなハリが欲しい。美声のグリエルモ、コンスタンティン・スフコフと共に、演劇的にも満足させられた。緻密な音楽作りだが流れが止まり、3部作最後の音楽的豊満さが出て来なかったが、今後改良されていくであろう。